



まことを語り 腹をなぐるな
もめられれば ぞしくあれど
分かち与えよ この三つにて
まことのしあわせ 得る身とな
らう

「ダンマバダ」三三四
京都女子大学「聖典」
一一二頁



新型コロナウイルス 感染症を縁として

仏教学非常勤講師 小池 秀章

「コロナよりも怖いのは人間だった(神奈川県ドラッグストア店員)」これは、二〇二〇年の「輝け!お寺の掲示板大賞」で、大賞に選ばれた言葉です。新型コロナウイルス感染症(以下、新型コロナ)が広がり始めた頃、多くのお店でマスクが品切れになりました。その時、いつも笑顔で買い物をしていただお客さんが、新型コロナにかかったらどうしようという不安から、「どうしてマスクがないの?」「私、常連なんだから取っておいてよ!」などと、そのイライラを店員さんにぶつけたのです。

私は、テレビのニュースで、このような店員さんの話を聞いた時、「非常時にこそ、人間の本性がでるんだなあ。悲しいことだなあ。」と他人事のように思っていました。しかし、外出の時は、マスク着用が通常になって以来、マスクをしていない人を見ると、思わず睨んでしまいます。私も店員さんにつく当たった人と、全く同じ本性を持った人間だったのです。親鸞聖人は、自らのことを煩惱具足の凡夫(煩惱だらけの愚かな人間)と受け止めておられます。掲示板の言葉に、「吾輩は凡夫である。自覚はまだない」「吾輩は猫である。名前はまだない」をアレンジしたものです。

いろいろな言われるんじゃないかということが心配です。(略)ひどいことを言われたら傷つくし、悲しくなるから言わないでいようと思うけど、そんなことを言ってしまうかもしれない。正直、どんなふうになるのか全然わからないです。」(二〇二二年二月二十七日「朝日新聞・夕刊」より)

これは、小学五年生の作文の一部です。「コロナで死ぬことより、感染した後にいろいろ言われるんじゃないか」というところが心配です。」というところから、新型コロナに感染していない人たちが苦しめているものは、病気のものではありません、病気に伴って生まれる差別や偏見だということに気づかれます。

ただ、この作文の中で私の心に突き刺さったのは、後半の部分でした。私だったら、「ひどいことを言われたら傷つくし、悲しくなるから言わないでいよう」と思いますが、「何をしてかすか分からないこの私が、生きていく」(「学仏大悲心」という言葉を残されています。「何がおきるか分からない人生」だということ、時々、気づかせていただいています)が、何がおきるか分からないこの人生を、何をすべきか分からないのか全然わからな

いです。」と書いているのです。とても正直な思いだと思っています。親鸞聖人は、「しかるべき縁があれば、どのような行いもするものである(さるべき業縁のもよほさば、いかなるふるまひもすべし)」(「歎異抄」第十三条)と言われています。私たちは、縁があれば、どのような行いをするか分からない、危うい存在なのです。大神信章氏(光林寺前住職)は、「何がおきるか分からないこの人生を、何をすべきか分からないのか全然わからな

な急がなくてもよいことを争い合っている」という文章があります。そして「この激しい悪と苦の中であくせくととはたつき、それによってやつと生計を立てているに過ぎない。身分の高いものも低いものも、貧しいものも富めるものも、老若男女を問わず、みな金銭のことで悩んでいる。それがあろうがなからうが、憂え悩むことに変わりがなく、あれこれと嘆き苦しむ、後先のことをいろいろと心配し、いつも欲のために追い回されて、少しも安らかなときがないのである。田があ

れば田に悩み、家があれば家に悩む。(中略)田がなければ田が欲しいと悩み、家がなければ家が欲しいと悩み。(「仏説無量寿経(現代語訳)(九五〇九七)」)と、あります。これは、二五〇〇年以上も前の釈迦さまの説法ですが、現代の私たちの在り方と、少しも変わっていない

ように思います。お釈迦さまは、私たちが急いで求めているものは、本当に急ぐべきものか、もっと大切なものがあるのではないかと、問いかけてくださっているのです。浄土真宗では、「お聴聞を大切にします。『お聴聞』とは、仏さまのみ教えを聞かせていただくことです。そして、そのみ

家を建てます。木枠のガラス窓は爆風でことごとく吹き飛ばされてしまいましたが、屋根は残っています。この景色、見覚えありませんか。二つ目は電柱の位置、そして三つ目は歩道の緑石に巻き込み部分が見えるところです。左端の家屋には「渋谷通東大路東入三丁目上馬町」と書かれた仁丹の住所看板が貼られていました。もうお気づきのことでしょう。この写真は、現在の渋谷交番の北西角から撮影されたものでした。

この写真を手を持ち、交番の角に立ち、同じアングルで写真を撮ってみませんか。皆さんの通学路と七十七年前の空襲という事実が、一瞬で結びつくことではないでしょうか。(史学科・坂口満宏)

京女への通学路 いまむかし

④1945年 京都・馬町空襲



一九四五年一月十六日、京都に初めての空襲がありました。馬町空襲です。正確な死者数は不明ですが、四十人以上の方が亡くなり、三〇〇戸以上の家屋が被災したといわれています。女専の第三小松寮と京都幼稚園も直撃を受け、大破しました。

この写真は、今熊野商店街で写真店を営んでいた村中秀光さんが、空襲の数日後に撮影したものです。寄せ集められた瓦礫で道路が埋め尽くされている様子が窺えます。この写真の見どころは、カメラマンの村中さんがどこに立ち、どの方向にピントを合わせていたのかがはっきりわかることです。その手掛かりの一つは、まさに遠近法の図のよ

うに立ち並ぶ二階の家屋です。木枠のガラス窓は爆風でことごとく吹き飛ばされてしまいましたが、屋根は残っています。この景色、見覚えありませんか。二つ目は電柱の位置、そして三つ目は歩道の緑石に巻き込み部分が見えるところです。左端の家屋には「渋谷通東大路東入三丁目上馬町」と書かれた仁丹の住所看板が貼られていました。もうお気づきのことでしょう。この写真は、現在の渋谷交番の北西角から撮影されたものでした。

この写真を手を持ち、交番の角に立ち、同じアングルで写真を撮ってみませんか。皆さんの通学路と七十七年前の空襲という事実が、一瞬で結びつくことではないでしょうか。(史学科・坂口満宏)

令和4年10月 月例礼拝日程表

日	曜日	講時	対象学生	担当
3	月	1	現社1A・1B	西・打本
		2	史学1A・1B	内手・西山
		4	児童1	黒田
4	火	1	心理1	藤井
		3	造形3A・3B	赤井・西
		4	英文3A・3B	森田・清基
5	水	1	養育1	野呂
		3	国文3A・3B	小池・中西
6	木	1	現社3C・3D	釋氏・藤井
		4	現社3A・3B	川元・那須
7	金	1	食物1A・1B	打本・井上
		2	心理3	普賢
		3	児童3	塚本
11	火	1	教育3	黒田
12	水	1	法学3A・3B	普賢・西
		1	現社1C・1D	那須・西山
14	金	2	教育1	井上
		4	英文1A・1B	塚本・川元
		1	造形1A・1B	井上・南條
17	月	2	食物3A・3B	黒田・西
		3	国文1A・1B	中西・壬生
		1	法学1A・1B	西・赤井
18	火	1	養育3	小池
19	水	2	養育3	小池
24	月	4	史学3A・3B	壬生・中西

標

八月六日に縁あって広島を訪れた。広島原爆の日である。敗戦後十七年を過ぎた。当時の状況を十分に学びつつ爆者の話を直接聞くことができる世代は、今の学生の皆さんがほとんど最後であろう。

被爆者には語り部もおられるが、ご自身の体験を語ることをされなかつた方も少なくないと聞く。思い出すこと自体が強い苦痛である方もおられるであろうし、言語に絶する体験を伝えることの困難さを思われた方もおられるものと想像する。釈尊はさとりを開いたあと、梵天の懇切な要請を受けてようやく説法を決心したと伝えられている。この伝承が伝えようとする内容の一つに、さとりへの境地を未体験の者にそれを伝えることの困難を示している、と言われる。人間の思慮を絶したさとりへの境地を伝えることは、甚難である。

親鸞が尊敬した中国の高僧に曇鸞がいる。曇鸞は「非常の言は常人の耳に入らず」という言葉を残している。仏法は常識人(常人)の思慮を超えた非常なる教えであって、それは自己の経験にとらわれる常人には容易に受けとめ難いのである。言語を絶する体験を、私たちが言葉だけでその体験者と同様にすることは難しい。もちろん、戦争体験と仏法とは別文脈の話でもある。けれども、被爆者の声を聞くことができる最後の世代であることを思い、精一杯の想像力を働かせて、その経験を聞く努力は私たちにできるのではないだろうか。(義)



研究も人生も「偶然」をどう活かすか

文学部教授 山田 雅彦

前任校も入れると、本学教員生活も今年で三十四年目、秋には六十五歳となって来春には定年退職するところまででした。私はフランス中世の都市や地域の実態解明を専門フィールドとして研究していますが、なぜこんな分野にとりくんでいるのだろうかと最近つくづく思います。

私が大学院に進学して研究を続けたいと思ったのは、大学三年生の後期が始まった頃です。高校時代、私は世界史も好きでしたが、それ以上に地理が好きでした。気候や地形や産業構造や町の名前が好き、大学入学後も

手にする本はたいい地誌もので、万人に不評の人文地理学の授業が面白いと公言して不思議がられる変人でした。歴史学の現代的課題などを議論している「進歩的な先輩」(偏見でごめんなさい)からすると、まことにノンポリな凡人だったわけです。当時廃れつつあったとはいえ、大塚史学系、マルクスの唯物史観に関する学術書をまずは読むのが目覚めた学生の定番だったときに、私はまったく別の関心からウェーバーやマンスフィールドや羽仁五郎の都市論を読み、そしてシカゴ学派の都市社会学まで古本で

買ったものです。ひとつ時はアメリカ史も面白いかも、と思ったことさえありましたが、書店で見つけた軽いフランス都市紀行本が決め手となって西洋中世史の先生(偏見でごめんなさい)に卒論の相談したのはよく覚えていません。先生はそれならと仏語で書かれた中世フランス・シャンパーニュ地方の都市史の研究書を手渡してくれ、これをまずは読みなさいということになりました。しばらくして、今度は経済学部の西洋経済史の先生を紹介され、その先生からも、同じシャンパーニュ地方を対象とする「伯領」形成史という

政治史・地域史に属する分野に新著を貸していた頂きました。そこから辛うじてシャンパーニュ中世史関連の諸論文や史料を収集し始めました。何の因果か中世シャンパーニュ地方の都市と地域の歴史が卒論と修論のテーマになったのですが、なぜシャンパーニュとまわりから問われても、内発的理由などあるはずもなく、返答に苦慮したのを覚えています。もちろんいろいろと理屈はつけましたが、後付けです。

しかし、こうした「後付け作業」はそれなりに自分の研究の意匠を考

え、研究の裾野を広げる鍛錬になったようにも思います。シャンパーニュ地方で大規模な定期市(大市)が開催されていたことから、私はその後西欧中世の市場の意義という問題に焦点を当てて、中世ヨーロッパ市場史の研究に広く取り組むようになりました。また、シャンパーニュ伯がその発展に関与していることが明白なことから、中世の地方権力と経済現象の関係を再考するという問題群が見えてきました。かつて大塚史学が取り組んでいた古いテーマですが、私は研究途中からそれらの古い問題関心と対峙することになり、自分なりに新しい方向性を示せる可能性を感じました。

フランス行きの留学試験には失敗しましたが、代わって受けたベルギー政府の試験にパスし、フランドル地方のヘントに二年間滞在する機会を得ました。これも偶然の産物と言えそうで、やはり西洋経済史の先生の助言があつて実現したものです。フランドル、そこ

は言わずと知れた中世ヨーロッパ経済の一大中心地。市場史に取り組む私にとっては、実は行く

べき留学先であったように思います。公用語であるオランダ語など全然勉強していません。暗黒模索の状態です。ヘント大学に行き、最初は本当に戸惑い

ましたが、ヘントの学風は実に心地よいもので、少しずつオランダ語も読むようになりました。中世ヨーロッパ都市史研究の世界には長くピレンヌという巨人が聳え立っていました。当時のヘント大学はフルビュルスト教授を中心に、まったく新しい都市史の構築に取り組んでいました。その新鮮な学風は私を鼓舞しました。ヘントでの私は本場の研究論文を踏査しては、毎日のように文献をコピーし、帰国後もしばらくは、ヘントなどフランドル諸都市の発展、あるいはフランドル地域の論文を書き続けました。数年後、「中世フランドル都市の発展と在地流通」が私の学位論文となったのも、偶然の留学生活なしには考えられません。

このように、私の研究人生の転換にはいつも「偶然」が関わっています。それでも、その偶然を活かそうとした自負はあります。格好良いとは言

ませんが、「偶然」を「後付け」する、研究と関連づけていうならば、与えられた場を理解し、どのような使い方ができるのかよく知ろうとしてきたように思います。研究とは対象とする素材の分析から何かをつかみ取ることですが、私は新世界を理解するために常に先行研究をやや広めに蒐集しました。その作業が自分の地平線を広げてくれました。

シャンパーニュ地域史が西欧市場史に、そしてフランドル都市・市場・伯領史に、そこから権力と経済の関係、転じてして市場と流通の管理の歴史、そして管理となれば都市当局による文書行政の歴史、また市場と流通に欠かかせない貨幣の歴史、さらに枝分かれして中世初期の定住史、このように私の関心は次々と広がってきました。棚から牡丹餅こそは、けつして粗末にはしてはいけないということでしょう。

京女生の皆さんも、瞬時でも面白いと思ったことを大事にし、ちょっとしたチャンスを生分に活かしてください。そして人生とは時に大きく転換するものと思つた方が生きやすい。

アップル社創設者のスティーブ・ジョブズ、俳優のリチャード・ギアやベネドikt・クルス：彼らの共通点が「熱心な仏教徒である」ということは、日本においてあまり知られていない。

アメリカ合衆国の主流の宗教は、キリスト教プロテスタントだが、現在仏教人口は伸び続け、将来ユタや教を抜き第二位の宗教となる可能性が高い。何故アメリカ人は、仏教に魅了されてくるのか？ その疑問に答えてくれるのが本書である。

著者の武蔵野大学名誉教授で日系三世のタナカ氏は、一九四七年山口県に生まれ、一九五八年に日系二世の両親と渡米し、カリフォルニア州マウンテンビュー市の真宗寺院に幼少期から通ったという。スタンフォード大学卒業後、米国仏教大学院と東京大学から修士号を、

カリフォルニア大学バークレー校から博士号を授与された浄土教研究者の氏は、真宗僧侶であり、アメリカ仏教研究の第一人者でもある。全七章からなる本書の第一章では、仏教の認知度をアメリカで高めたセレブたちを紹介し、仏教人口を「仏教徒」「仏教共感者(ナイイト・スタンダード・フレイスト)」「仏教に影響を受けた人」に分類した上で、その驚異的な増加について解説する。第二章ではアメリカ仏教五十年史を論じつつ、十九世紀にアメリカ大陸に上陸した仏教が、二十世紀に価値観の転換を求めたビートニク達により再発見され、カウンター・カルチャーを経て、新たな姿をあらわした経緯を明かす。第三章では、アメリカ仏教の五つの特徴(平等化・行中心・社会参加・

超宗派性・個人化)を挙げ、解説をする。第四章以降は今後仏教が社会に貢献する可能性を、「自由近代主義」「心理学」「科学」と仏教との関わりや、グローバル化する世界での役割という観点から考察する。

本書を通してタナカ氏は、仏教はアメリカの地で伝統的・宗教的枠組みから自由となり、「目覚める宗教」に変化したことを指摘し、この近代的要素を当初から含んできた「アメリカ仏教」にこそ、未来の仏教のあり方自体が潜み、日本仏教の学ぶ点があると示唆している。

過去カナダ開教使として国際伝道に携わり、アメリカ仏教を研究する私自身も、氏の意見に首肯する。未来、世界に向けて仏教の持つ可能性は、無限大なのだから。

法のことば

まことを語れ 腹をたてるな
もとめられれば 乏しくあれど
分かち与えよ この三つにて
まことのしあわせ 得る身となろう

【ダンマパダ】二三四
【京都女子大学】『聖典』二二二頁

幸せになりたい、という人には、この詩にその秘訣が三つ示されています。その三つはいずれも、他者にいかに向きあうか、ということに関わります。

でも本当にこれで幸せになれるんですか、という声も聞こえてきそうです。ここで説かれた事柄は、たとえば古い「ラッキーカラー」とは異なります。こうすれば、あなたの願いが叶います、とか、幸運が舞い降ります、とかいった話ではありません。こうした生き方のうちにこそ、本当の幸せが見出されると釈尊は説くのです。

そしてこの教えを受け止めたとき、私の生き様が問われることになります。折にふれて偽りを語り、腹をたててばかりで、貪りの心を捨てることのない自身の姿がみえてこないでしょうか。仏教は、私の姿を照らし出し、その私が歩むべき道を照らし出すのです。

(藤井 隆道)

『目覚める宗教』

(アメリカに出会った仏教―現代化する仏教の今―)

ケネス・タナカ著 サンガ 二〇二二年

シリーズ 智慧の蔵 46

アップル社創設者のスティーブ・ジョブズ、俳優のリチャード・ギアやベネドikt・クルス：彼らの共通点が「熱心な仏教徒である」ということは、日本においてあまり知られていない。

アメリカ合衆国の主流の宗教は、キリスト教プロテスタントだが、現在仏教人口は伸び続け、将来ユタや教を抜き第二位の宗教となる可能性が高い。何故アメリカ人は、仏教に魅了されてくるのか？ その疑問に答えてくれるのが本書である。

著者の武蔵野大学名誉教授で日系三世のタナカ氏は、一九四七年山口県に生まれ、一九五八年に日系二世の両親と渡米し、カリフォルニア州マウンテンビュー市の真宗寺院に幼少期から通ったという。スタンフォード大学卒業後、米国仏教大学院と東京大学から修士号を、

カリフォルニア大学バークレー校から博士号を授与された浄土教研究者の氏は、真宗僧侶であり、アメリカ仏教研究の第一人者でもある。全七章からなる本書の第一章では、仏教の認知度をアメリカで高めたセレブたちを紹介し、仏教人口を「仏教徒」「仏教共感者(ナイイト・スタンダード・フレイスト)」「仏教に影響を受けた人」に分類した上で、その驚異的な増加について解説する。第二章ではアメリカ仏教五十年史を論じつつ、十九世紀にアメリカ大陸に上陸した仏教が、二十世紀に価値観の転換を求めたビートニク達により再発見され、カウンター・カルチャーを経て、新たな姿をあらわした経緯を明かす。第三章では、アメリカ仏教の五つの特徴(平等化・行中心・社会参加・

超宗派性・個人化)を挙げ、解説をする。第四章以降は今後仏教が社会に貢献する可能性を、「自由近代主義」「心理学」「科学」と仏教との関わりや、グローバル化する世界での役割という観点から考察する。

本書を通してタナカ氏は、仏教はアメリカの地で伝統的・宗教的枠組みから自由となり、「目覚める宗教」に変化したことを指摘し、この近代的要素を当初から含んできた「アメリカ仏教」にこそ、未来の仏教のあり方自体が潜み、日本仏教の学ぶ点があると示唆している。

過去カナダ開教使として国際伝道に携わり、アメリカ仏教を研究する私自身も、氏の意見に首肯する。未来、世界に向けて仏教の持つ可能性は、無限大なのだから。

(釋氏 真澄)

お知らせ

＊本願寺書院・飛雲閣拝観(後期)＊

日時：10月12日(水) 15:15~17:00
場所：本願寺書院・飛雲閣・唐門
募集人数：30名(先着順)
参加費：無料

＊秋の見学会(バスツアー)＊

日時：10月29日(土) 9:00~17:00
行先：石山寺・三井寺・ミシガンクルーズ
募集人数：22名(先着順)
参加費：1,500円

※申込方法等は京女ポータル、宗教部掲示板または宗教教育課(仮設校舎A2階)で確認してください。
※なお、今後の国内や本学の状況によりましては、開催が取り止めとなる場合があります。その場合は、京女ポータルにてお知らせします。

芬陀利華アンケート
読んだ感想やコメントをお寄せください。
(すぐに答えられるアンケートです)